

*The Fulbrighter*  
*in*  
*Chubu*

No.21

June 2011

Chubu Fulbright Alumni Association

## *The Fulbrighter in Chubu No. 21*

### 目 次

#### 講演

- アメリカの大学院教育  
四国学院大学名誉教授 加瀬 豊司 …… 3
- 日本での生活について  
前 デンソー冠フルブライトフェロー ステルツア・アンドリュウ ……16
- フルブライト研究員としての米コーネル大学時代の思い出  
分子科学研究所、北陸先端大学院大学名誉教授 木村 克美 ……22
- EWC留学生としての体験を回顧して  
東海学園大学名誉教授 梅沢 時子 ……30

#### 随想

- 忘れえぬ人—アダムス先生のこと  
椋山女学園大学理事参与 木下 宗七 ……34
- 会員便り ……36
- 会務報告 ……52
- 会則 ……54
- 役員名簿 ……56
- 会員名簿 ……57



加瀬氏



Steltzer 氏



木村氏・梅沢氏

## 2010年度フルブライト中部同窓会・EWC 同友会

愛知大学車道校舎本館13階 第3会議室  
2010年5月23日(日)

講演1: 4時—4時50分

テーマ: 「アメリカの大学院教育」

副題: 学際性 (アメリカン・スタディーズ) の体験から

四国学院大学名誉教授 加瀬豊司 (Toyoshi Kase, Ph.D.)  
フルブライター 1974-76 (75更新) 全額支給大学院プログラム

<用語>

WSU (Washington State University) ワシントン州立大院修士課程  
(All-expense Graduate Program)

UMCP (The University of Maryland, College Park) 州立メリーランド大院博士課程  
(Sabbatical Leave / 1992 四国学院大学研究年期)

AMST (American Studies), “Amster”

Department of American Studies, College of Arts and Humanities を広い意味の  
departmentalization として捉え「学部(組織化)」として表現。

### はじめに

一昨年四国学院大学を定年退職し、名古屋に戻ってまいりました。文学部(英文学科・言語文化学科)と修士課程・文学研究科(比較言語文化専攻)で教えながら、日系アメリカ人の研究を「移民母村」の多い瀬戸内海地方でしてまいりました。香川に赴任当初は、車の番号に「高知」とみると愛知、「愛媛」も愛知でしたが、20年以上もいるとついに逆転してしまいました。星野先生、すみません、「愛大」はまだ愛媛大を連想してしまいがちです。当面、フルブライト「四国」同窓会からの“転校生”としてお許し願いたいと思っています。とにかく名古屋は22年ぶりで、その変化に驚くと同時に、今も道に迷っています。現在の愛読書は「街の達人、デカ字の名古屋ロードマップ」です。こんな状態で、本日講演をさせていただき、「恐縮」と「緊張」をしております。いろいろご迷惑をおかけするかと思いますが、今後共よろしくお願い申し上げます。

西海岸にあるワシントン州立大院 (WSU) の修士課程 (フルブライト) での 74・75・76 年の後、東海岸の州立メリーランド大院 (UMCP) の博士課程 (サバティカル) で 92・93~2005 年にワシントン D.C. の郊外、メリーランド州で過ごしました。サバティカルの 92-93 年以降はずっと四国学院大学でフルタイ

ムで仕事をしていましたので、長期の休み（夏・冬・春）を利用してアメリカ通いをしていました。その間、専攻分野はずっと「アメリカ研究」でした。生活・滞在・旅行型で通算30年間、いろいろなことを経験いたしました。フルブライター、EWCのグランティアの方々は当然それぞれの領域で貴重なそれぞれの体験がある訳ですが、その専門分野固有の内容よりも、その中身を外側から支えている枠組み、つまり教育の「制度や方法」に共有できる要素がより多くあるように思います。この意味で今日の講演会では、専門・研究の内容ではなく、アメリカの大学院教育に関わる“フレーム”に焦点を当ててみたいと思っております。

体験をベースにしていますが、体験談は共有できる要素がないと退屈になりますし、愚痴話や自慢話はこれまた嫌な気分になります。同窓会ですので正直になって、アメリカでの悪戦苦闘の中で、どのように教育に関わり、どのように感じ、どのようになったかを、自分なりの“felt-reality”としてしばらくお話をさせていただきたいと思っております。

記述系の“学際性”のプログラムに身を置いていましたので、heuristics（発見）と、hermeneutics（解釈）という研究の2側面においては后者の「解釈」、そしてその解釈内容を表現する最も重要な手段としての「記述」の世界で“暗中模索と悲喜交々”の生活をしておりました。こんな話が少しでもお役にたてばと願っております。

## A. 学際性の理念と制度

私の場合、修士・博士課程とも一貫して学際研究型の American Studies でした。学際研究のアメリカン・スタディーズ、AMST は制度として反学部化 (anti-departmentalization) で始まりました。

私の留学した70年代、WSUの American Studies では組織上 Dept. of English に正式所属し、専攻を English/American Studies と称しておりました。カリキュラムはアメリカ文学とアメリカ史の両方がバランスよく配置されており、American Studies のセミナーを合せると合計30単位（3単位の10科目）以上がコースワークとなっていました。当時の学際性 (interdisciplinarity) としての American Studies は、文学の「普遍性」と歴史の「個別性」の相矛盾と思われる二要素の「結合と融合」を理念・目標にしていました。

しかし当時、アメリカン・スタディーズ・プログラムとして立ち上げた (英) 文学部と歴史学部の真剣さは、担当の両学部教授陣の眼の輝きからはっきりとかがわれました。文学の普遍的な美的価値 (aesthetic merit) と特定の時間と場所に根ざす史実的実証性 (historical evidence) の統合は、プログラムにとって永遠の課題のようでした。しかし今から思えば、この結婚は“家庭内離婚”のように思っています。

時間はとんで90年代、私の UMCP 博士課程 (アメリカン・スタディーズ)

の全コースワーク修了時の最終総合試験 (Comprehensive Exam) において、「理念と方法」分野の中の選択問題の一つに「文学と歴史の関係性」が出題されました <資料 1 >。文学系教授の中には「文学のテキストに歴史社会性が乗り込んでいる (superimposition)」、と論じ、また同大の歴史学者の中には「歴史 (historiography) は解釈そのものだ」と切り込み、その記述性における文学的価値を重要視していました。文学と歴史の関係性は、昔も今も AMST の重要な議論になっていました。

実際の学際的アプローチとしては、文学であれ、歴史であれ、「テキスト」を「より大きな社会的な脈絡 (a larger context) に関わらせる「関係性」の追求が、両大のよくあるスタイルでした。制度として細分化した学部内では、複数領域を横断し、それらに関連づける学問的方向は出にくいことから、AMST の「学部化」自体は、学際性理念から照らし合わせて言えば、“自殺行為”として問題視されていました。しかし、UMCP は制度化しないと予算も秘書もままならぬという現実から、WSU のように個別の学部教員の「出向&寄合い」方式ではなく、独立した AMST の学部を組織化し、ファカルティを Department of American Studies 所属の専任教員で構成しています。AMST を念頭に置いた Amster による AMST のための Department です。専任教員 11 名でそれぞれの専門領域(文学、エスノグラフィー、文化、移民史等)を深化させ、かつ、領域の枠を超え、より大きな「アメリカ (性)」(“あれば”) というテーマに関わらせるというものでした。またカリキュラム上どうしてもカバーできない分野は、院生達が、文化人類学、社会学、教育、コミュニケーション等、他学部の提供授業を一定の範囲内で関連領域 (supporting field) として履修する方法が取られていました。

## B. 教育課程 (Beyond MA—30 単位以上)

全体的なカリキュラム構造は、UMCP の Ph.D. の場合、10 科目 (30 単位) 中、7 科目 (21 単位) ~8 科目 (24 単位) と 7~8 割が AMST Proper。内訳は以下の通り。

Course Work (30 hours required + 12 hours of AMST 899)

- 1) Pro Seminar
- 2) AMST Seminars (9 hrs.) with CORE AMST Faculty
- 3) AMST area of concentration (9-12 hrs) (この表現はハーバード流)
- 4) Supporting field (6-9 hrs)

<Department of American Studies Ph.D.

Worksheet より>

博士課程履修のタイムラインは CCPDD <Course + Comp + Prospectus + Dissertation + Defense> が多くの大学院で共有されている全貌です。

履修の修了後、三領域(「必修領域」)の AMST の歴史・理論・方法、「選択必

修領域」、「自由選択」として関連領域)からそれぞれ25枚程度の筆記(論文形式)の総合試験(Comprehensive Exam) <資料1> が課せられ、合計で70~80枚。次に博士論文審査委員会に5人の教授を依頼。了承後、「office hour and/or appointment」を活用し、機会があれば指導を乞い、その後を追っかけてまわしていました。Prospectus(予備審査)には、論文のイントロダクションを提出し、その5人から質問攻めでした。rationale(理論的根拠)で議論しないと、とうてい勝てない(自分の領域なので密かに勝とうと思っていた)が実感でした。

論文提出後のDefense(最終口頭試問)は文字通り最終段階なので、合否の決定に関わることは勿論のこと、例えば審査教授の欠席の場合に立てる代理教授の決定手順、また日頃直接指導で関わらない大学院の代表教授の当日の本人確認等々、事細かに文章化がされていました。驚くほどアドミニストレーションが慎重<資料2>でした。これらはaccountabilityという名のアメリカの情報公開と説明責任の反映と理解しています。

しかし自分のコンプの際、大学側に(私にも)予期不能の事(3日続いた大停電事件(blackout))が発生しました。ディフェンス日程は延期、帰国当日の早朝2時間のみで急遽全員のスケジュールを組み込んでもらいました。ディフェンス終了後、合否の結果を別室で待つことになりました。10分後、部屋に入ってきたDpt. Chairが一言、「Hi, Doctor Kase!」。今までの論文指導における「言葉攻め」を忘れさせるような単純明快な「呼びかけ即合否結果」でした。瞬間、この圧縮のコミュニケーション・スタイルについては「Hi, Jack.」の呼びかけは“ハイジャック”を含意)を思い起こしましたが、すぐ次の瞬間、対比して思い起したことは4年前の口頭試問(prospectus)でした。長時間、矢継ぎ早に問われ続け、胃が痛くなったprospectusでしたが、今回は思いがけないブラックアウト“助けられ”、短縮のディフェンスでした。(20年にわたる今までの渡米経験にまで遡れば、ホテル火災、狙撃隊との遭遇、ストライキ、ブリザート、トルネード、ハリケーン、9.11等々、多くのアクシデントで貴重な時間を失いましたが、最終的にはブラックアウトのおかげで2時間の博士号スピード取得。)終わりよければすべてよし。本当にラッキーな最後でした。

### C. コースワークと評価

論文に対するコースワークとの関係を大事にしている点は、どの先生も同じで、初めから授業の全貌は「事細か」と言うより、「事明らか」にされていました。20世紀の終わり頃から日本の大学でも「シラバス」、「学生による授業評価」、「GPA」、「成績評価の厳密化」等々よく話題になってきていますが、WSUにいた1970年代の頃にはこれらは既にあった大切な教育要素でありました。(ただ成績評価については、これとこれを出して何ポイントずつ、発表点が何パーセントと基準を細分化(grade breakdown)した教授もいた。) GPA (Grade

Point Average) は昔も今も大学院の正規登録では A/B/C/D:4/3/2/1:F/0 (UMCP では 2001 年以降成績評価 (transcript) に+・-、ただし+・-自体は計算に入れない) 計算式は 4 点満点の合計点 ÷ 科目数 (単位数が異なる場合は比率で) <資料 3>。(日本では、大学受験用に高校から大学にだす調査書の評定平均の計算方法と似ている。)アメリカの大学院では B (3.0) Average “以上ないと”(“異常な意図”と頭に定着)、課程からキックオフと両大学のオリエンテーションで何度も聞かされていました(学士課程は C 以上)。WSU の International Office からは full-time student にとって「異常な意図」となると、「フルブライト奨学金終了と日本へ強制送還」、脅されていました(次の学期で B 平均以上に回復すれば OK の執行猶予あり、とすぐ後で分かったが)。

授業(セミナー)そのものの成績評価は、一つの授業(3 単位)について 30 枚前後の seminar paper (小論文)が必須。膨大な読書量(広範囲からとられた関連文献箇所コース・パケット [著作権を払ったコピー集、よって高値。一冊 1 万円前後]、一冊単位の特定教科書数冊~10 冊と配布プリント類)に基づく授業中のディスカッション。(修士課程では学部生も一部とれる授業をとったことがあったが、blue book [青表紙の記述式試験の小冊子]に論述する試験付。)WSU、UMCP 共、それぞれ 10 科目(30 単位)以上が課程修了に必要な総単位数。コンプとプロスペクタを含め、コースワークの paper だけでトータル 900 枚以上憑かれた様を書いていました。学生がする「授業評価」は○で選ぶ選択肢方式よりは、質的記述がほとんどでした。70 年代の WSU では学生が書く「授業評価」の取り扱い「担当教員に渡すのは成績評価が終わってからで、それまでは研究科長が管理」と詳しい説明付きで、かなり慎重かつ意識的に取り組まれていました。しかし 90 年代の UMCP では、授業評価は当たり前になっているせいか、何かさばけていた雰囲気と感じていました。

もっとも恐ろしかったのは、授業細目(シラバス)でした。全体的な授業目標と各授業の目標、授業内容、教員サイドからの何をどこまでするかといった academic expectations は明解そのものでした。その裏付けとしての「課題図書」、「推薦図書」、「関連図書」を合せると読書量は超膨大。この reading の“傾斜”つき expectation の中で、上位の成績のためには推薦・関連図書の読破とその文献処理が肝要。このような要求水準については、プリントアウトされたシラバスと授業中口頭でも念を入れた事前説明がされていました。

同様に、フィールド・ワークを伴う科目に慎重な配慮が文言化され、徹底した周知が行われていました。リサーチャーとしての“倫理”は、学内では「human subject review」と呼ばれ、厳正な手続きが必要でした。インタビュー(許可を得てテープ取りをした場合、研究後そのテープは誰のものといった ownership の明示も含む)等、研究対象に人間が関わる場合、事前同意書(informed consent)を付けた細かい書類を授業担当者とアドバイザー連名で大学側に提出。研究者のスタンスに関わる human subject は全学の検討委員会の許可がないと研究も

論文もストップしてしまいます。

これらの多岐にわたる説明を含め、詳細なシラバスは学生にとっては緊張の世界でした。しかし（ちょっと頑張る言え）その知的な刺激にワクワクもしました。シラバスの構造は、授業進度よりは、授業での深度を表わすことが中心であり、学生の知的訓練を狙う教授の意図は、明示された深い中身から明らかでした。教授陣は授業を通して学生を成長させるやり方を知っているし、「知的やらせ」も the sense of humor で学生をのらせてしまうので、「知らない内にやっていた」と今も感服しています。授業内外で集めたシラバス集、シラバイは現在も“愛読書”の一つになっています。

返却されたペーパーの評価については、その理由が分かる充分詳しいコメントが担当教授よりあるので、成績の善し悪しに関係なく気持ちがいいものでした。（本当は怖い。）実は WSU と UMCP で一科目ずつ途中の段階で失敗しています。WSU では、学期途中の paper で、ある文学作品の 2 つの比較研究するところ、さらにもう一つの作品を含めてしてしまい結果は D (“You didn’t follow the instruction.”)。青くなり、すぐ交渉して rewrite のチャンスを 1 週間もらい B に回復。こんな時は深夜まで図書館に残り、ウィークエンド返上で苦しい日々の連続でした。UMCP では、一年目の最初の学期、日系移民について日本語から英語への翻訳文をどう paper に組み入れるかで「移民史」担当教員との行き違いがあり、paper にはなんと F と書かれ rewrite。(F と書かれた 1 2 月の当夜、授業後の夜、外側がフィルム状に凍りついた車の中で、一時間仮死状態になっていました。) 後で気を取り直し、質・量向上に必死になり、2 週間かけて 60 枚近い“大作”を提出しました。しかし悔しいことに書き直しという理由で最終成績は C。この C を消すために次学期、死に物狂いで A を取り、回復できましたが、全く青息吐息そのものでした。

成績全般については、WSU での修士時代後半あたりからは、評価は A だと思えば A が取れるようになりましたが、20 年後の UMCP の博士課程は予想とは一ランク違っていました。A-paper のつもりが B でした。（せめて A- が欲しかった。次の学期は意識と感覚を変え、必死で A が増やした）。しかし正直なところ、首都圏にある research university としての大規模州立大での記述系授業で、A を取るのは至難の業、自分は非英語圏出身だからと、半ば諦めてはいましたが、無念。留学の初期には、「あなたはフルブライト生だから英語は問題ではないよネ」と軽く言われたこともあります。冷静に考えれば、博士課程担当の文学系アメリカ人教授の「言語芸術」には、今のところ全く「降参」しています（たぶん、永久に太刀打ちできないと確信）。

アメリカの修士・博士課程にそれぞれ短・長期に在籍し、途中の paper 段階は ABCDF の全部を経験しました。簡単に暴露すると正式な成績表 (transcript) には両課程とも D F はなく、C は前述の書き直しの C 以外、C は UMCP での初学期登録の文学関係 1 科目だけ。WSU、UMCP とも後半は A が最多になったも

の、今でも GPA と聞くと、当時の必死の思いが生々しく蘇ってきます。しかし UMCP での ABC の散りばめられた「厳密な成績評価」と「評価の誠実さ」には“ずいぶん喜んで”もいます。英語の論述に関する私のアメリカンドリームはナイトメアと背中合わせでしたので、非英語圏出身で、記述系の博士課程でオール A の Ph.D. Holder の方々は全く尊敬してしまいます。

#### D. 社会人院生

社会人に対して大学院での修学を可能にするため WSU も UMCP も実際の授業は夜間開講が半分以上でした。もう一つは学籍期間の保障。在籍期間はそれなりの理由があれば柔軟な体制が敷かれていました。こんな制度の中で、WSU は最短の 18 カ月 (summer session を含む) で修了。一方 UMCP は日本での勤務校との関係で最長の 12 年弱。UMCP では 5 年以内にコースワークを終え、更に 5 年以内に論文を書き終えないと大学院からキックアウト。ただ半年は嘆願書 (petition) を書けば延長可で、更に半年は理由があれば (justifiable) 延長可。さらなる 6 カ月は“危機管理”に相当する“執行猶予”としての機会のみでした。この最後の延長機会は、論文の進捗状態が分かる実際の論文を指導教授に見せて、実績と見込み (論文の半分もしくは 2/3 以上完了等が条件) があれば、論文指導代表教授とデパートメントの長と連名で書類を提出。そして大学の最終判断。(許可された後はどんな物理的な不可抗力が半年後に起こっても自動的に即、不可。)

この 3 度目の嘆願書に対しては Graduate Dean から警告書ももらいました。“~ as this is absolute, final, unalterable, and set in concrete. Under no circumstances will another appeal or petition be considered for further extensions of your present status.” — いわゆる最後通牒でしたが、これによって今回は必ず完成と強い後押しを得ました。“Your dissertation should be the intellectual culmination of the course.” ともいわれます。一定の制限はあるものの、制度上、授業で培った研究の質をつぶさないという意味の“質保証”と受け取っています。総合的にみるとコースワークの後、dissertation の完成ぎりぎりまで年限を延ばしている (延ばさざるを得ない) 長期在籍院生に対して、大学が行う学位取得の“応援型”と言えましょう。(この間、論文完成まで最低一単位は継続して登録。最低 10 単位で GPA の計算には入れないが、成績は通常の A~F と S (satisfactory) / U (unsatisfactory) がつく。)

#### E. 専門領域

アメリカについて何がアメリカ的 (What is most American about America) か、といった追求や、一言で言う “Americanness” は、内容の深い追求であっても、アメリカ全体を固定して取り扱う「文化本質主義」に陥りやすい考え方のスタンスです。こういった根強いステレオタイプはもはや時代遅れであるかもしれ

ませんが、自文化中心主義に基づく優越主義 (assumed superiority) がとかく頭を持ち上げやすくなるのも事実です。

首都ワシントン D.C.の御膝元であるメリーランド州の、この4万人を超える大規模校である UMCP は、広く関係性の中での構築、the social construction or reality つまり「文化構築主義」を意識的に大事にしているようでした。それは東部のハーバード大の“grand narrative” (“新天地” マサチューセッツから始まる intellectual history が “authentic, legitimate”) の雰囲気に対して、意識的に距離をおく姿勢が生み出すものだと思います。しかし、まだハーバードに知的貢献で後れを取っているのも事実。(世界の AMST での最初の Ph.D.学位はハーバード大の Henry Nash Smith. 著作に *Virgin Land*. ハーバード大から Myth and Symbol School 学派が発祥。) ハーバード大を意識してか「UMCP の AMST は残念ながら世界第二位」と、“自嘲”とも“気概”とも”取れる自己評価を先生方からよく聞きました。案の定、“myth – symbol” approach はコンプにも出題されました <資料 1 >。

首都圏のニューイングランド地方へのこのライバル意識は、UMCP に在籍中、地理的な競争とも受け取っていましたが、私にとってはもっと重要なことが一つありました。何故、ここ UMCP の AMST のプログラムには「移民史はニューヨークのエレス島からで、太平洋からのサンフランシスコのエンジェル島経由がないのか」という問いかけでした。太平洋移民は、ここ東海岸では“under-representation”なのだろうか。さらに言い切ると、このことは「非白人の研究者・学者には知的な貢献が望まれず、情報提供程度だけで良い」といった低い社会的期待値と同義なのだろうか。このような“もやもやした”疑問は卒業後に UMCP を訪れた時、全員(移民史の担当教員は他大学に転出)の AMST の所属教授と秘書からの“答え” —“Did you meet Dr S...?” で氷解しました。日系人教授 S 氏を Dpt. of AMST の専任教員として採用とのこと。基本コンセプトを「文化多様性」に変え、カリキュラムを新しくしたとのことでした(この Diversity Advocate への模様替えは、できれば、在籍中にして欲しかった)。

一つに焦点に当てて追求することは、集中した自己努力を必要しますが、「文化構築主義」にある「関係性の追求」は方法論が厄介です。相互作用は相手への影響と相手からの影響で一筋縄ではいかないことが特徴。相互性の根源は自分が歴史を構成すると同時に、自己もそれに拘束される相互拘束性です。それを受けて“~ within which I am a part” という表現は各授業で同時多発していました。「ノイラート (Neurath) の故障船」(航海しながらの船の修理)のメタファーや、芥川龍之介の『侏儒の言葉』にある「我我は人生と闘いながら、人生と闘うことを学ばねばならぬ」は相互依存の考え方でありましょう。相互の影響行為は動きの中で物事をとらえるインタラクションであって、この動態相が「文化本質主義」の“固定”観念を嫌っている理由であります。

文化人類学学者のクリフォード・ギアツ (Clifford Geertz) は、他文化の文脈

を大切にし、その記述の方法を厚い記述 (thick description) と特徴づけていますが、相互行為を論じる場合も同様、言葉が厚くなりがちです。UMCP の dissertation の指導教授の一人は、日本でも研究歴のある日本通のユダヤ系アメリカ人でした。「学際的学問は“learning along the way”で行けば?」、と動的側面を念頭に置いた励ましをこの先生からよく受けていました。関係性を論じれば、いや論じ切らなければ相手に伝わらないから、まさにここに自分の意見を述べる“厚い”ものが存在し、調査・報告よりも「解釈と表現」が肝要、と指導され続けていました。集めたデータを使って何を達成するかが肝要 (use ~ to achieve ~) と言えましょう。この目的達成のため、論述言語の必要性は当然高くなります。このように言葉による伝達の促し (communicative urgency) が生まれる故か、“Toyoshi, talk, talk, talk to death.” と、豊かな(ありがたい!) 言語世界の構築を常日頃、指導されていました。(他方、喋りまくるアメリカ人院生達には “Folks, hope you make a meaningful contribution!”)

#### F. “英語的” 論理と表現技術

学際領域としての専門領域間の関係づけはかなりの部分、自分で議論・論述しないと成立しない領域ですので、とことん言葉による talk が必要。修士の時代「paper には説得力が不可欠で、その方法は、段落単位の展開が効果的」と嫌になるほど聞かされていました。とは言え、“日本的” 論理展開が血肉となっている自分自身としては、論旨の展開については、topic sentence を冒頭に出しての paragraph 単位での展開だけが本当に論理的なのか、と割り切れない気持ちも抱いていました。初めの半年間は WSU の先生方とこの“英語的” 論理についてよく議論をしたものでした。office hour に顔を出すと「また paragraph のことか」と笑われたこともしばしばありました。

ある時 UMCP での一人の先生から次のような大文字のコメントが返ってきました。“NO MATTER WHAT, FOLLOW THE ORGANIZATION. It is, as you suggest, constraining, but constraint is necessary at final stages of a paper” (これはまた WSU 時代の論旨の展開問題の再発と感じました)。この先生からは、日本人は非常にいいものを持っているのに、言語の明晰さ (clarity) が脆弱、と手厳しい批判をもらったこともありました。日本にも客員教授等で長く滞在し、NHK にも放映された日本通の歴史学者でした。何度も何度も繰り返された一見「易しい」質問は “How do you know when you know?”。この問いにはかなり気合を入れた自分からの説明が必要でした。この説明過程でどのような「組み立て」方で自己表現するか、鋭くチェックされていたと記憶しています。(この質問は、今でも自分にとってまか恐ろしい “obsession” になっています。)

論述の expository writing に、これ以外の“自由”はないと現在は“洗脳”されていますが、この書き方の自由のなさは、「方法論的拘束」つまり、発信の作戦の側面 (implementalism) と割り切って考えています。諸外国からの留学生生同

士が、このロジックを使ってかなりコミュニケーションをうまく成立させているのはその成功事例でしょう。この英語的発想を活用すれば、紹介・説明のレベルではなく、意見表明の国際的通用性のあるコミュニケーション・レベルへの移行が可能ではないでしょうか。現在この英語的な組み立て方はかなり知られてきていますが、実践となると困難を伴うのが、(特に日本では)現実です。しかし、この方法を使えば、論理に基づく双方のコミュニケーションが成立し、ディスカッションが可能になるので万人向きとも言えましょう。言葉の世界におけるこの説得術は英語のお家芸。この議論から論文も生まれているのです。この考えを勤務校の日本人院生(修士課程)に対して、発想の転換を促した writing skill のクラスに応用してみました。彼らが日本の土壌で慣れ親しんできたメンタリティーとメカニズムを揺さぶることから始めてみました。“自己”に対するの“destabilization”“deconstruction”は<資料4>を参照下さい。

UMCP のこの先生の授業は、学生たちに議論の応酬合戦をさせ、その後先生が取りまとめるのが常套手段でした。このまとめ部分から学生は急に皆、口を閉じて、ひたすらメモ取り。「なるほどな表現」にアメリカ人学生がいたく感動しつつ、このノート取り作業を続けます。この先生のコロンビア大学院生時代、アメリカ教育史の大御所と言われていたアドバイザーと基本的な歴史観が合わず、苦勞の連続。その苦しみの中で、ユダヤ的不屈な精神 (hutzpah) からか、このアドバイザーに勝るには「表現技術」と確信し、the craft of writing に全エネルギーを費やしたそうです。実はこれは「アメリカ人は英語で苦勞しないから楽」と、ふとつぶやいてしまった私に対する「叱責」でした。

この先生のもとで多くの言葉による表現芸術を学びました。例えば「新しい変化に向かう気持」について、“~the willingness to aspire and to imagine new ways of knowing, doing, and being ~”等は「文化再構築」の議論に役立つ表現の一例です。気楽にそのまま(少しだけ変えても)使うと、すぐ見破られ“Toyoshi, footnote me!”と反撃されます。(苦笑、しかし厳密な academic honesty が学べた。)

私の dissertation のディフェンスの際、あの厳しかった先生方から論文について“well-organized and well-written”との評価をもらいました。ただ、議論不足の一段落のみ書き足し、その報告のみでOK、と一言、追加があっただけでした。

(「合否」のことで頭がいっぱいで、修正については、重度の再提出・再評価から軽度の自己修正・報告までの詳細文書があったことはすっかり失念。)

## G. 研究パラダイム

今までの読んだ文献の「理論操作」(今までの関連出版物をまとめて論文に)をし、テーマを絞り、今までの資料(インタビュー記録、古文書館で発掘した原史料)を加え、しっかり書いて、ちゃっかり博論完成!と博士候補生[candidate]になれた直後浮かれていたことがありました。しかし、6語文で返

ってきた指導で浮かれた気分はすぐに墜落。“Every good researcher can do that.” 他人の業績に乗りかかるのではなく、自分自身の論文のアイデンティティをと指導されました。自分の authorship を考え直し、独自性については、自分の視点の考察 (reflexivity) を含め、最終的にはエスノグラフィーの手法を使い、日系アメリカ人の歴史を通してみられる「文化変容」と「人間行動」の関係性を検証・論述しようと決めました。(詳細は拙著『文化変容と人間行動—ワシントンの日系二世ライフ ヒストリーを通して』学術出版会 2007 *Nisei Samurai in Washington D.C.: Culture and Agency in Three Japanese American Lives* 参照。)

そこでいろいろなエスノグラフィーのインタビューを行いました。さまざまなタイプの日系アメリカ人に対して、また同一人物に対して複数回、データ収集方法も複数回のミーティング方式から一カ月単位の住み込み方式の participant observation (参与観察) まで形態を広げました。フィールドノートを毎晩忘れずにつけ続け、膨大なインタビューのデータが集まりました。信念としての深い価値志向や時代の推移で揺れ動く感情等々、読めば読むほど面白くもなってきました。データ量をもっと増やせば、解説式のインタビュー集だけで論文完成になるのではないかと、との甘い誘惑にかられたこともありました。しかしすぐに、「データの“紹介”型ではだめ」と、また簡潔4語文 (“You can't stop here.”) が返ってきました。指導に従って取り組めば、当然、分類・分析に始まり、洞察力に富んだ解釈・記述が必要です。まずどんな枠組みで、どうこれらを絞り込むか、あれこれ考え、あれこれ試みてみました。3世代間の文化変容をコンセプトにして、同じファミリーの一世・二世・三世を求めて北米大陸をまわってみた時期もありました。しかし、3世は全米に散らばっている離散の“diaspora”型のため、その分フィールドワークは物理的に非常に困難であり、計画は頓挫してしまいました。

二世は日米両文化に関わっているので、今度は二世世代を中心領域とし、その日米の関係性を基にした文化変容に着目することにしました。思い切って中心人物を3人の二世に絞り込み、深みを狙って対象にする時間的スパンはその全生涯、と幅をもたせ、それぞれのライフ・ヒストリーを多角的に解釈してその歴史記述 (historiography) を行うことに決めました。そしてライフ・ヒストリーにおける主人公の「人間行動」と「日米文化価値観」を関係性のコンセプトとし、その“lived history”の深層領域にある situated meaning を限りなく抉り出し、日系アメリカ文化論の再構築を考察することにしました。

しかし、問題は「何故、三人構成なのか」でした。これは指導教授の先生方からの当然の質問・詰問でもありました。長期休暇中(夏・冬・春)はUMCP通い。その間“Why three?” “Why three?” “Why three?” がうわ言のように頭から離れませんでした。(これは思考の組み立てに関わる部分で、言葉の「言い訳」のできない世界。)この「三構成」の rationale を考えるだけで一年が終わり、論文そのものは書けず、前に進むことができませんでした。その1年間の

dissertation credit の成績はSでした（登録した他の期間の dissertation credit の成績はすべて調子よくいったのだが・・・）。

新約聖書記述では一人の「イエス」をマタイ、マルコ、ルカの「3人」がそれぞれの立脚点で観察し、イエスの全体像をバランスよく構成しています。簡略化すれば、マタイは“選民思想”から、マルコは“人の子”として観ているし、ルカは“異邦人”を念頭に置いていると言えましょう。それぞれを“intra-nationalism”“individualism”“internationalism”との概念化も可能でしょう。この「三構成」は共観福音書 (synopsis) とよばれ、聖書の伝統が行きわたっているアメリカでは理解されやすかったので、しばらくその「三次元構成」にかぶせて自分の研究方法を説明していました。しかし、実際の論文で絞り込んだ「三人の二世」の概念をどのように特色づけ (characterization)、さらにそれらがどのようにより大きな日系アメリカ人社会の文脈に繋がっていく (contextualization) のか、そして最後の作業として、アメリカン・スタディーズ特有の関係性パラダイムの構築 (contribution) が残っていました。

機会あるごとに論文審査委員会の先生たちと認識論や現象学の論議を重ね、最終的には「時系列」による統合枠を使って書いてみることに落ち着きました。「三時制」を日系アメリカ人の解釈枠として使い、その文脈化を英語で次のようにまとめてみました。All three were invariably steeped in the past, actively engaged in an assessment of the present, and inspiringly cast toward future. もうほんの少し具体的に言い換えます。The nisei were plunged into formidable reality where they acted on “the present now” not by discarding their parent’ tradition as unusable, but, rather, by transforming the past as meaningfully usable to their current concern and future imperatives. この過去・現在・未来の仕分けを「過去を紡ぎ、現前の意味をつくり、未来に投げかけていく」と統合させ、この時系列を、日系アメリカ人の二世世界の多様性を解釈する枠組みとして活用することにしました。

「過去・現在・未来」の基本区分は日常世界にある枠ですし、また「史的出来事の現在的意味生成と未来への予知・洞察」の立体的統合は基本的な聖書釈義 (hermeneutics) の方法であった事にも気付かされました。(日本での勤務校であったミッションスクールのキリスト教の伝統にも感謝。)

三人の対象に対して「時系列」を絡ませ、それによる二世世界への広がりにはパラダイム化できる (paradigmable) フレームワークとの確信に至りました。この理論の妥当性 (desirability) は、日系アメリカ人二世の歴史の中で検証し、自分で論じなければならぬ記述の世界です。このような論証作業は、ホモロクエンスとしての the burden of proof とも言えましょう。この必要性から the vigor of writing が生まれ、ここに国際的に有用な文系の発信性が育っていく大切なプロセスがあると信じています。

言語は手段であり、視点・視角も何かを浮き彫りにする手段・方法です。自分自身も大切な著者 (authorship) としての存在ですが、「自己も方法論の一部」

と割り切れば気が楽です。自分の視点・視角の絶対視に対して、故ウィリアム・フルブライト氏の言った「力の驕り」(*The Arrogance of Power*) は、主体の特権化に対して self-critical reflexivity (批判的省察) の気づきを生み出すことになったと言えます。フルブライト氏は無自覚・無反省・無批判に自分や自分達的前提を当然視し、それを押しつけることの問題性を指摘しましたが、それをさらに言い換えれば、深い次元で、文化的多様性からくる豊かさ “greater knowledge” を半世紀前から示唆していたと言えます。

「手段」や「方法」は広く共有できるものであるので、学びの環境をつくれれば、制度として万人にむけた教育が成立するはずです。最終的な博士課程においても、なお授業という名の豊かな教育は成立する、こんな考えでアメリカの高等教育は、研究系の大学においても最後の最後まで授業を大切な discipline として実質化していると強く感じています。(再掲、“Your dissertation should be the intellectual culmination of the course.”)

こういった授業に関わる教授陣の学外評価について、自分のメリーランド大学博士号授与式で96ページからなる「卒業式次第」冊子に次のように記載されていました。“... the quality of our (UMCP) faculty—with one Nobel Prize winner, six Pulitzer Prize winners and scores of Fulbright scholars —is among the finest of any research university in the United States.” (関連拙稿記事は *The Fulbrighter*, No. 27, Winter 2007) ノーベル賞、ピューリッツァー賞の後にフルブライト賞が入っていたのはうれしかった。最後に先輩・同輩・後輩の皆様方の学問的業績と社会的貢献に対して、自分も自分なりの felt-reality でもって、フルブライト精神から同感できる機会を提供してくれたフルブライト・プログラムに深く感謝しています。

## 1. My Life

Andrew Steltzer, 2008-2009 Fulbright fellow studying Japan's English education at Kanazawa University up in Ishikawa-ken

- Currently live in Mie's Shima-shi
  - o Below Ise and Toba, was previously five smaller towns
  - o Small area but I live in Ugata, the most populated area
- Working as an ALT at two JHS and three elementary schools
  - o Not JET but private sector ALT
  - o ALTIA Central
- My usual day Mon – Fri
  - o Mon, Tue, Wed, Fri – bigger junior high school, walk to school in the morning with students, track practice after school
  - o Thurs – small junior high school, one class per grade, very fun/different class dynamic
- Weekends are usually free, but sometimes I'll have track events

## 2. Small Town Goodness

- For me what makes life really enjoyable is living in a small town
  - o I come from a very small town in Maine
    - NE US, 6,000 people, rural
- Scenery is obviously a part of this
  - o Walk to work is green, you can hear nature rather than cars and people
- More than the closeness to nature is the closeness to people
  - o After living in Japan for a while, a place that is very different from my home in many ways, I've found that what makes me feel comfortable, even at home, is not the location but the people around me
    - The 'family' that I make for myself
    - Growing up I thought I would only be able to live in the country side since I always thought big cities felt cold and lonely
    - I've learned it's the home that you make for yourself that's important and makes for a good life
- Quickly found that I was literally close to people around me
  - o Lived within shouting distance of 8 students
  - o Morning walk to school/evening walk home was usually with students

- I speak pretty good Japanese and I figure part of an ALTs job is to get to know students, so outside school in particular I have no problems using all Japanese to just chat with my students
- Because I worked at all three local schools parents and students in the area almost all knew me or knew of me
  - In Jusco I was always saying hi to people
    - This is what makes life great for me
    - Where ever I go, there's someone to say hi to, someone who runs up to me saying "Andy, Andy!"
    - I know people who would bemoan the lack of privacy or the inability to escape their students even after school, but I love it
  - Even all the way in Ise, I've had students shout at me from cars as they pass by
    - Even had a student chase me down around new years while I was jogging to give me some fresh picked lemons from his grandfather's
    - Students at the pool grab their swim coach and explain who I am
    - It's this sort of stuff that starts to make me feel grounded someplace, when people reach out to you, even if it is just your wacky students
- I really like this stuff because one of my ideals in life is no matter where I live I'll have a 'neighborhood' to call home
  - Someplace within a town that I can especially call my own, a place where I really belong on a personal level
  - Didn't have that much last year in Kanazawa
    - Considered it a small victory when I got my neighbors to say こんにちは back to me
  - Now though I really feel like I fit in where I live
    - I've gotten to know a lot of my neighbors and one family in particular often brings me food
      - Mother makes all kinds of sweets and extra sushi also tends to come my way
    - If it starts to rain and I haven't noticed the boy next door will go out on his veranda and shout to me

- One really cool thing was when my neighbor, the father of one of my students who I had never really met, stopped and gave me a ride home when I was walking home in the rain from the bank one day
    - I thanked him and he said “think nothing of it, we’re neighbors”
- Something else I’ve found I really enjoy is cooking
- Many people ask me if I had any big culture shocks when I came to Japan
- not many because I was prepared
- BUT the grocery store was a culture shock
  - Supposed to be a familiar daily place, but I was at a complete loss
    - Language and unfamiliar items
    - 20 varieties of miso, what the heck is a gobo, renkon?
  - All had to be learned from scratch
- Now I enjoy cooking and am much more familiar with things
  - Often make niku-jaga, tonjiru, yakizakana, saba no miso ni, iridoufu
- Also a good way to get to know people
  - Ask for cooking advice

### 3. Getting Involved and Being Open

- I’ve told people about how much I enjoy my life for the above reasons and my Japanese friends especially will say “oh, well that’s because you speak very good Japanese”
  - I think that is definitely part of it
    - People at the pool I go to light up when I say something to them in Japanese and they realize that I can speak with them
- BUT THE KEY IS THAT I TRY TO SPEAK WITH THEM!
- **Regardless of culture, people are people, no matter where you are**
  - When I studied abroad in Nagoya I became really close with the taiko group that I joined and my Japanese wasn’t spectacular by any means
    - But I went with a big smile and my electronic dictionary in my pocket and managed to make some really close friends
      - Actually stayed at the leader’s house last night and had dinner with a bunch of the members
    - Taiko is actually one of my favorite hobbies and wherever I am in Japan I try to join a local group

- I'm a member of a small group in Shima that practices a few times a month
- Not only great exercise but also a great way to get out and meet people
- Again, all part of getting yourself out there and making that feeling of community for yourself
- Most people in my neighborhood I've become close with because even those I don't know well or live a ways away from (people I see on my walk to Jusco) I'll still greet
  - Those nearby, I'll stop and talk with them, show them that I want to be a part of the community
  - Certainly language allows me to do this easier, but I personally think that even if my Japanese wasn't so great I could manage
- In getting to know people like this on a more personal level I find that they're often really curious about America or how my life is
  - As a Fulbrighter last year it was one of my duties I think to get to know people and really be a working part of cultural exchange
  - Even though I'm no longer Fulbright I still believe that making these international personal connections is really important
    - These people in the small towns may only get to know a handful of Americans in their lives and so my actions can actually have quite an impact on what they think of America
- Because I have such an impact, especially on young kids who may have never met/gotten to know a foreigner I need to check myself, my pride sometimes

4

I'm often told that I'm very Japanese because of the way I act or say things. Part of the time this is because I've learned how to interact in Japan and Japanese so it's intentional on my part to seem "Japanese" in the sense that I react appropriately to the situation. There are times, however, when I'm simply acting the way that I always act and I'll often tell people "no, Americans can act like this too, this is normal for me." Seems to be this idea that I'm either American and different or not very American and more Japanese when I'm the same. Why can't I be an American who just acts similarly? Again, I think it's just because people don't have much of an image of Americans besides stereotypes shown in the media or the one or two ALTs

they've met. I think the key is that no matter how frustrating it might be for me personally to be repeatedly told I'm more Japanese than Japanese people I have to meet the comments and questions with friendliness and patience. If I seem frustrated or upset then that will become part of people's image of Americans.

Get angry with people saying "hola" to me or laugh a little and be happy that they at least tried to say something in a foreign language to me. Probably a lot of other people think that I'm Spanish, but don't bother to do anything about it. These people are trying to do something out of kindness.

When people ask me what I eat regularly they seemed shocked when I say I cook standard Japanese food; niku-jaga, iridoufu, yakizakana, nabe, etc... And they say again, wow that's so Japanese of you. I'm thinking in my head "well...I'm in Japan and the ingredients in Japan do lend themselves to Japanese cooking." But again, I hold back. If I put myself in their shoes and I had a Japanese friend living near me in America I might say a similar thing if he/she loved cooking steaks or thick chowders.

## 5. Challenges

- Size issues
  - o Being 191cm in Japan (6'3.5") can be a blessing and a curse
    - Crowds are never stifling for me and I'm wicked easy to find in a supermarket
    - Most seats on buses and doorways aren't built for my size
      - Doorways in my apartment are too low for me
      - Besides general inconvenience it is pretty hard on my posture I think
  - o Clothing, particularly pants and long sleeved shirts, is generally a no go
  - o Shoes are also out
- Language
  - o I've passed the JLPT 2 級 but there is still an enormous amount that I cannot read or understand
    - Usually I view this as a welcome challenge, a way to learn
      - Every day I come home knowing how to use another word or phrase
    - But there are times when I'm tired that I just wish I could easily and naturally read through things without requiring so much brain power

- Work
  - I'm only the assistant
    - Despite my deep interest and more than your typical level of knowledge (for an ALT) there are times when I just have to do what I'm asked to do
    - This is my job as the ALT, to support the teacher to the best of my ability
- Rewarding side of work
  - I spent a lot of time last year looking at the pressures and expectations being put on elementary school teachers who will soon have to teach English
    - Some not well prepared and many just don't have confidence in ability to teach English
  - My personal goal is to help these teachers have the confidence to teach English
    - I think an ALT should support teachers as much as students
    - I've offered to teach mini class room English lessons to elementary school teachers after school
      - Been really fun
  - This is extremely satisfying for me because I'm actually helping out one of the areas I thought needed help, one of the areas I thought as a native speaker of English I could put my abilities and interests to best use

## フルブライト研究員としての米コーネル大学時代の思い出

分子科学研究所、北陸先端大学院大学（名誉教授）木村克美 <sup>(a, b, c)</sup>

私は、1960年9月から二年間にわたって、コーネル（Cornell）大学にフルブライト研究員（Research Associate）として、化学教室 S. H. Bauer 教授の研究室で「電子線回折による分子構造の決定」というテーマで、研究に参加させていただきました。今日は、当時の思い出を中心に、パワーポイントのスライドを見ていただきながら、

1. コーネル大学を選んだ経緯
2. 氷川丸の船旅
3. シアトルでのオリエンテーション、そしてイサカへ
4. コーネル大学・物理化学の Bauer 研究室
5. 大学町イサカでの生活
6. アメリカ国内旅行
7. アメリカ留学で役立ったこと

などについて、お話しさせていただきます。

お手元の資料は、私の略歴でございます（脚注参照）。私は名大の大学院で「化学における分子構造の研究」をしておりました。当時は大変な就職難でした。博士課程修了後は、東大・物性研の文部技官として「分子の電子状態の研究」を始めました。翌年（1960年）から二年間、フルブライト研究員として外国出張させていただきました。帰国後、数カ所の研究機関（理研・阪大・北大・分子研・北陸先端大）において、分子科学の研究を続けてきましたが、フルブライト研究員時代の貴重な経験は十分に活かされたと思っております。

---

[脚注(a)] 昭 29 名大理卒、昭 34 名大大学院修了（理学博士）、昭 34-37 東大物性研・研究員、昭 35-37 Cornell 大 Research Associate（フルブライト研究員）、昭 37 理研・研究員、昭 38-43 阪大基礎工・助教授、昭 43-54 北大応電研・教授、昭 54-平 4 分子研・教授、平 4-10 北陸先端大・教授、平 11-16 文科省ナノ分子研究班・特別研究員（総括責任者）

[脚注(b)] 昭 41 日本化学会進歩賞、平 01 日本化学会賞、平 10 紫綬褒章、平 15 旭日中綬章

[脚注(c)] (研究) 化学における基本的分子の分子構造の決定と電子構造の解明。高分解能レーザ光電子測定装置を開発した（分子科学に貢献）。オリジナル論文は約 210 報。

## 1. コーネル大学を選んだ経緯

私は新制度の大学・大学院の2回生でした。理学部から大学院時代にかけて、私の研究は「電子線回折法を用いた分子構造の決定」でした。大学院修了後も大学で研究を続けたいと考えておりましたが、新制の博士号を取得しても、すぐ助手に採用される可能性はありませんでしたし、当時の日本には今のような博士研究員の制度はありませんでした。大学で研究者になるには、まずアメリカの大学でポストドクあるいは Research Associate になるのが早道と考えました。そこで、大学院修了一年前から、数カ所のアメリカの大学(Brown, Columbia, Cornell, Harvard, Michigan など)の専門の近い教授にポストドクに応募したい旨の手紙を書きました。いずれも丁寧な返事もらい、感心しました。例えば、現在は空いたポストはないが、申請している研究費が通れば、招待したい、といった返事が幾つもありました。当時、私の研究成果が国際学術誌に掲載されましたので、論文別刷の交換を通して、アメリカやヨーロッパの研究者と交流がありました。

あるとき、Virginia 大学の物理化学の教授から、ポストドク希望者はいませんか、といった内容の手紙を頂きました。研究分野は私の希望と少し違っていましたが、私自身がポストドク探しをしている大学院生で、応募したい旨の手紙を書きましたところ、すぐに Research Associate として採用したいとの返事でした。そこで、1959年度フルブライト研究員に応募してみましたところ、残念ながら不合格でした。

自費渡航の可能性もあるかと考えていましたが、新設の東大物性研究所に研究技官のポスト(博士研究員のような職)があるとのことでしたので、Virginia 大学との話は諦め、東大に就職することにしました。

東大に移って間もなく、Cornell 大学の化学の Bauer 教授から連絡があり、研究費が通ったので、Research Associate として招待したい、とのことでした。その研究は、私の希望の分野でした。そこで、物性研の長倉三郎先生に相談したところ、せっかくの機会だからアメリカへ出張してよいとのことでした。コーネル大学から正式の受入れの書類をもらい、1960年度フルブライト研究員に応募しました。東京で面接があり、その結果、フルブライト委員会から1960年4月1日付けの合格通知を受取りました。

その年の六月上旬、公用旅券を東大事務局から受取り、いよいよアメリカ留学の念願がかない、感激したことを憶えています。フルブライト委員会から、旅行日程についての連絡があり、氷川丸(横浜出港8月27日、シアトル入港9月8日)、シアトルでのフルブライトのオリエンテーション(9月8-11日)、さらにシアトルから目的地ニューヨーク州イサカ市までの列車とバスの旅行日程(9月12-15日)など、詳しく知らされました。

横浜出発前、フルブライト委員会主催の2度のパーティーが東京であり、招待されました。一つは American Club での Tea Party(6月27日)、もう一つは Fulbright House での Cocktail Party(8月25日)でした。いずれも、フルブライト研究員の人達との楽しいパーティーでした。

## 2. 氷川丸の船旅

私は1960年のフルブライト研究員でしたから、ちょうど50年前になります。私が乗った氷川丸は、8月28日に横浜港を出て、9月8日にシアトル港に着く十二日間の船旅でした。私は、家内と二才半の娘と一緒に氷川丸に乗る予定でしたから、荷物をすべて送り出し、横浜へ行きました。ところが、船に乗る前に子供が猩紅熱を患ったため、氷川丸に乗せてもらえず、家族を残して私だけ乗船することになりました。横浜港から出発の際は、私の同僚二人と母親が見送りに来てくれました。横浜港の岸壁は、見送りの人達でいっぱい、テープの交換は素晴らしい光景でした。

船の上の生活は、比較的のんびりしていて、天気がよければ甲板でフルブライト研究員の人達とよく雑談していました。ときどき映画の上映などもあり、楽しい毎日でした。朝・昼・晩は、いつも数名の同じメンバーでテーブルを囲んでの食事でした。機関士の方も一緒でしたので、外国航路についての珍しい話がいろいろ聞けました。食事はアメリカ流のものが多かったように思います。グレープフルーツなど、私には初めてでした。

氷川丸は、現在、横浜の山下公園の岸壁に繋留され、一般に公開されています。数年前、私は山下公園に立寄って、氷川丸を見学してきました。客室、集会場、機関室などを見て、当時が思い出され、とても懐かしいかったです。船のロビーでは氷川丸について一時間のビデオの上映があり、戦前からの氷川丸の歴史がよく理解できました。その映像の中で、1960年の氷川丸に乗船したフルブライト研究員とその家族、約120名の集合写真(写真1)が映しだされました。甲板に「1960 FULBRIGHT」と大きく書かれていて、右手の前から二番目ぐらいに私が写っていました。それから、2008年ノーベル化学賞を受賞した下村脩(おさむ)博士が一番後の列にいます(中央やや右、長身の人)。下村博士は名大(化学科)平田研究室で博士号を取得され、氷川丸でプリンストン大学へ行かれるところでした。



写真1. フルブライト研究員とその家族の集合写真（氷川丸にて、1960年8月）

氷川丸は、戦後になって1953年から1960年まで横浜-シアトル航路で運航され、フルブライト交換留学生に利用されました。私の兄・木村資生（1953年ガリオア・フルブライト留学生）は、戦後初めての氷川丸に乗って渡米しました。昔、私は氷川丸に乗った兄の写真を見ながら、私もぜひ氷川丸でアメリカへ行きたいと夢見ていましたが、最後の氷川丸でやっと実現したわけです。

ところで、家内と子供は、私より一ヶ月遅れて、横浜港から滋賀丸（貨客船）に乗って、サンフランシスコ経由でパナマ運河を通って、二十五日目にニューヨーク港に着きました。私は、その前日の高速バスでイサカを立て、早朝にニューヨークに着き、港へ出迎えに行きました。船から降りる子供の元気な姿を見て、安心しました。約二ヶ月の間、家族との連絡は英文の電報だけで、何かと大変な思いをしました。当時、日本の一般の家庭には、まだ電話がない時代でした。エメールは往復二週間かかっていたいました。なお、サンフランシスコ港に寄港する滋賀丸に宛てた私の手紙は、家内に届いたとのことでした。

### 3. シアトルでのオリエンテーション、そしてイサカへ

シアトルでは、ワシントン大学のドミトリーに宿泊して（二泊三日）、フルブライトのオリエンテーションがありました。学長の挨拶で始まり、幾つかのグループに分かれて、専門の近いプロフェッサーとのミーティングがあり、学部の見学もありました。翌日は、観光バスが用意され、シアトルの銀行やスーパーマーケットに

案内されました。また観光地も訪れました。午後は、数名のグループに分かれて、それぞれ車で家庭に招待され、食事をよばれながら、アメリカの情報がいろいろ聞けて、とても参考になりました。アメリカの家の中は広く、隅々まで部屋を見せてもらい、びっくりしました。シアトルでのオリエンテーションは、アメリカで生活する上に知っておくべきことを詳しく聞くことができ、大変に有益でした。

オリエンテーションの終了後、参加者はここで解散し、各自それぞれ目的地へ向かいました。私は、鉄道のシアトル駅へ行って、昼すぎの列車に乗って (Northern Pacific)、丸2日間かけてシカゴに着きました。列車に展望車があり、私はときどき展望車から外の景色を眺めていましたが、広大な自然の風景がシカゴまで延々と続き、印象的でした。途中、モンタナの町を通りました。

シカゴの駅で列車の乗継ぎ時間が三時間ありましたので、数名のフルブライトの人達とシカゴ大学まで歩いて、大学のキャンパスを眺めてきました。シカゴの駅に戻って、午後4時半出発の列車に乗って、翌日の早朝にシラキュースで下車しました。それから、ハイウエーバスに乗って、目的地イサカに正午に着きました。

#### 4. コーネル大学・物理化学の Bauer 研究室

**コーネル大学** この大学はニューヨーク州中部のイサカ (Ithaca) にある総合大学です (医学部はニューヨーク市内)。この町の人口は約三万人で、大学関係者が多く、「大学町」と言ってもよいかと思います。広大な大学キャンパスは、日本の琵琶湖ぐらいの大きな湖に面した小高い丘の上にあり、周囲に山も多く、とても自然が美しいところです。大学の近くに滝があり、冬はこの滝が真っ白に凍り、見事な風景です。なお、コーネル大学は、Columbia 大学や Harvard 大学と並んで、名門アイビーリーグ8大学の一つです。スタッフの数は、電話帳で数えてみましたら、六千人ほどでした。

**Department of Chemistry** これは、化学系の学部でして、日本の理学部・化学科に比べて規模は大きく、三十五名ほどの教授 (Professor, Associate Professor, Assistant Professor) は、それぞれ独立の研究グループをもっていました。なお、ここの建物は、Baker Laboratory と呼ばれていて、昔 Baker という人の寄付で建てられたそうです。

**Bauer 教授の研究室** 私がフルブライト研究員として滞在したのは、化学の S. H. Bauer 教授の研究室です。研究室の目的は、「衝撃波による燃焼の物理化学的研究」と「電子線回折法による分子構造の研究」でした。数名の大学院生のほか、十名ほど博士研究員 (Postdoctoral Fellow) がいました (写真2)。イギリス、イスラエル、ベルギー、ポーランド、メキシコ、中国などからの外国人博士研究者で、非常に国際的でした。日本からは私を含めて3名ほどでした。



写真2. コーネル大学の物理化学 Bauer 教授の研究グループ (1960 年)

外国人研究者相互の交流もよかったと思います。毎年二度ほど、研究室の人達は家族と一緒に、Bauer 先生の自宅に招待されていました。夏は、皆でバーベキューをしたりして楽しんでいました。外国人研究者の家族と顔なじみになるよい機会でした。化学系学部全体のバーベキューも年一度はありました。

**フルブライト研究員としての研究とその成果** 私の研究は、電子回折法によって分子構造（形や大きさ）を精密に決定することでした。具体的には、次の四段階で実験と解析を進めました。(1) 真空装置の中でノズルから気体分子を吹き出す。(2) 電子ビームを気体分子に照射すると、電子が散乱されて電子回折現象が起きるので、写真乾板上に「電子回折像を撮影する。(3) 電子回折像は円形パターンになるので、その黒化度を中心からの距離（つまり、半径）の関数として計測する。(4) 測定した「電子散乱強度曲線」を理論式を使って解析し、分子構造を決定する。私が実際に取り上げた分子は硫黄のフッ素化合物など数種類の分子でした。コーネル大学の化学教室にはノーベル物理学賞を受賞した P. デバイ名誉教授がおられ、電子回折像から分子構造を導く理論式を発見した人です。私は、デバイ先生の計測機器をお借りし、お世話になりました。

**Bauer 研究室のティータイム** 毎日、午前十時半頃、ティータイムがあり、実験室の一角に皆が集まって、お茶を飲みながら自由に話し合ったり、教授から実験の進捗状況を聞かれたり、情報交換の場として、有益でした。後に、日本の私の研究室も、そうしたティータイムを設けていました。

**フルブライト研究員としての研究成果** コーネル大学での私の二年間の研究成果は、四つのオリジナルな論文と総合論文が一つあります。オリジナルな論文はア

アメリカの国際学術誌に掲載されました。総合論文は Bauer 教授が中心になってまとめたもので、ノーベル賞受賞者ポーリング博士の「六十五歳生誕記念」に捧げられた本（907 ページ、出版 1968 年）の中に掲載されました。その後、ポーリング先生から私もお礼状を頂きました。

ところで、私はコーネル大学のブックショップで、たまたまポーリングの有名な本「Nature of Chemical Bond」の改訂版（1960）を見つけました。改訂版の中に、私の大学院時代に発表した研究論文（イギリス「Nature」誌に掲載）が引用されていて、とても嬉しく思いました。

## 5. 大学町イサカでの生活

**アパート** コーネル大学にいた 2 年間、私たちはイサカのアパートに住んでいました。最初は University Av. のアパートに、翌年は N. Aurora St. のアパートに、そして最後三ヶ月間は、Delaware Av. のアパートに入りました。いずれも、大学に近く、便利なところでした。二度目のアパートは、すぐ前に Methodist Church があり、私たちの娘（三才半）はその教会の保育園に特別「スカラシップ」付きで入れてもらい、毎日楽しく通っていました。最初のアパートの時は、送迎用の車に乗ってやや遠い保育園に通っていました。同じアパートにノルウェー人の家族が住んでいて、子供たちは裏庭で仲よく遊んでいましたが、それぞれ自分の国の言葉をしゃべっていたようでした。

**長男の誕生** 帰国の年（1962 年）に、長男がイサカで生まれました。知らせを受けてすぐ病院（Tompkins County Hospital）に駆けつけましたら、担当のお医者さんが出てきて、にこにこしながら私に握手を求め、「nice boy」と言ってくれました。当時の日本のお医者さんに比べ、気持ち良い対応ぶりに感心しました。

**親切なイサカの人たち** この町には大学関係者が多く、親切な人が多かったように思います。家族ぐるみの付き合いもありましたし、よく家庭に招待して頂きました。家内に英会話を教えてくれたボランティアのアメリカの奥さんや、何かと相談ののってくれた親切なアメリカ人もいました。二年間この町に住んでいて、イサカのような大学町はとても生活しやすいと思いました。

**スーパーマーケット** 当時の日本にはまだスーパーマーケットはない時代でしたが、イサカには大きなのがあって、よく利用していました。買い物をしていると、アメリカ人の生活がよくわかるように思いました。それから、ドラッグストアも幾つかあって、珍しかったです。さらに、「Ten Cent Store」と呼ばれる店もありましたが、今の日本の 100 円ショップに似ていたと思います。そこでは安い Made-in-Japan の品が沢山ありました。

**中古車ポンチャックを購入** アメリカで家族と一緒に生活するには、自動車がないと、何かと不便ですし、行動範囲も限られます。車をもちたいと思っていましたが、たまたま友達の紹介で町のディーラーで十年ほど古い八気筒エンジンの綺麗な

「ポンチャック」があり、100ドルでしたので、買うことにしました。

**自動車のライセンス** 自動車を手に入れ、早速、車のライセンスを取得することにしました。アメリカでは、ライセンスをもった人が助手席に乗っていれば、運転は自由でしたので、自分の車で運転の練習ができました。イサカの裁判所で交通法規のテストを受けましたが、説明書を読んでおけば、簡単でした。それから、近くの道路上で、試験官が私の車の助手席に乗り、試験官の指示に従って右折・左折の運転をしたり、パラレルパーキングしたりするテストで、比較的簡単にライセンスはとれました。家内も同様に車のライセンスをとりました。

## 6. アメリカ国内旅行

**自動車の長距離旅行** 二年間近くのアメリカ滞在中、週末や夏休みを利用して、家族と一緒にずいぶん旅行ができました。Washington、Philadelphia、New York、Boston などの大都会をはじめ、イサカに比較的近い Syracuse、Rochester、Buffalo なども訪れました。さらに、カナダ (Toronto、Ottawa、Montreal、Quebec など) へも楽しく長距離ドライブができました。

**いよいよ帰国の途に** 1962年の夏、二年間のアメリカ生活が無事終わりました。八月の中旬、家族と一緒に車で New York 州をたつて San Francisco まで、Chicago → Madison → Rapid City → Denver → New Mexico → Grand Canyon → Los Angeles → San Francisco のコースを約一週間かけてドライブし、それから JAL プロペラ機に乗ってハワイ経由で帰国しました。

サンフランシスコまでの間、四才と生後六ヶ月の二人の子供を乗せてきましたが、八人乗りの車でしたから座席に余裕があり、長距離ドライブが可能でした。車は、サンフランシスコで処分しました (10ドルで買ってくれました。)

## 7. アメリカ留学で特に役立ったこと

フルブライト研究員としてアメリカで研究活動ができたこと、そして多くの外国人研究者と交流できたことの恩恵は、測り知れないと思っている次第です。帰国後、新しい分野を目指して分子科学の研究を続けてきまして、度々アメリカやヨーロッパの国際研究集会に参加し、二十数回の招待講演の機会が与えられましたが、基本的には、フルブライト研究員時代の経験が役立ったと感じております。コーネル大学での数々の素晴らしい体験が懐かしく思い出されます。

ご清聴ありがとうございました。

## EWC 留学生としての体験を回顧して

梅沢時子

(留学年次 1965-1966)

本会誌 *The Fulbrighter in Chubu* の第15号に私はフルブライターとしての体験(1968-1970)を寄稿していますので、今回は、フルブライターとしての留学を志望する契機と基礎力を与えてくれた、それ以前の EWC 留学生(1965-1966)としての体験について書こうと思います。

EWC での私の履修課程は TIP プログラムでした。それは、つまり、Teacher Interchange Program と言いまして、アメリカ各地の社会科高校教員やアジア諸国の英語科高校教員を対象にし、1年と2ヶ月に亘って受講するものでした。アメリカからの留学生は、アジア研究などの単位履修をし、一方、日本を含めたアジア諸国の留学生は TESOL つまり Teaching English as a Second Language (第2言語としての英語の教育)や、アメリカ研究の単位履修をすることが予定されています。私たちアジアの留学生は、ハワイ大学で I 学期と II 学期を過ごし、そして、夏期はフィールドワークとして、米本土ワシントンDC のジョージタウン大学で受講をし、加えて、アメリカ一周の旅を経験できるものでした。ホノルル市に滞在中は、アメリカの TIP 員との合同の会合を持ったり、一緒にハワイの島々を旅行したりする企画がありました。また、ホノルル市所在の高校のアジア研究の授業に向き、学生の質問に応じたりする 一種の奉仕活動もいたしました。ハワイを離れてから、アメリカ人 TIP 員はアジア諸国の、私のアメリカ人ルームメートの知らせに依りますと(日本滞在4週間に続いて、韓国、中国の香港——当時は未だ英国植民地、ちなみに返還は1997年7月——、さらに台湾、タイ国、インド、エジプト、ヨルダン、イスラエル、イスタンブール、アテネなど)旅行の途についたようです。そのように、単位履修をするが、学位取得を目指さないプログラムでした。

さて、私が EWC の留学に発ちました1965年という年は、前年1964年になってやっと日本では海外旅行が解禁された時です。そして、円の固定相場が1ドル360円の時でしたから、私の周囲には海外旅行の経験者は少なく、海外は実体感がないお伽話の国のようでした。私自身にとりまして初体験のことでしたから、これから載せます経験も素朴な印象の記録にすぎません。

私たち日本人 TIP 留学生は、横浜港から President Wilson 号に乗り出航いたしました。栈橋に立ち私たちを見送る人たちの手と甲板に立つ私たちの手の間につながる紙テープが揺れ、次第に船が遠ざかると、テープが張り詰め切れてしまうまで、感傷に浸りました。

船の中で、すぐオリエンテーションが始まりました。説明は英語でなされ、この時点で、もう英語の世界に入りました。私がつまづいた最初の英単語が cockroach であったことを今でも思い出されます。オリエンテーションのスタッフの方が、「ア

ジアの人は寮内に **dried fish** を持ち込んだりしますので **cockroach** が出てきます。そうしないで欲しいです」と注意されたとき私は「それはどのような生物ですか」とお聞きしましたら、その方は、さらに懇切丁寧に手真似を加え説明をされたのですが、今まで私の学生時代に語学練習として広く読みあさった文学作品の中にも出て来なかったような単語であり、どうもその正体の核心を掴めませんでしたので、ついに「それを私は知らないのですが、日本にいるものでしょうか」との愚問を發したのです。 (ちなみに **cockroach** はゴキブリでした)

かようにして、私たちを乗せたプレジデント・ウイルソン号は、船内には水泳プールが備えてある堅牢豪華な船でしたが、太平洋の真ん中に来ましたとき、上下に大変揺れましたため、船酔いで吐き気を催した留学生は殆どだったと言ってよろしいでしょう。晴天であり風も吹いていませんでしたのに、多分海流のうねりのせいだったのでしょうか。太平洋を渡ることの厳しさを実感しました。その時から3年前の1962年に堀江謙一氏がヨットで太平洋横断の独り旅を成就されたと聞いていましたから、その果敢さが肌で理解できました。

1週間の航海ののち私たちの船が着いたのは、なんと、真珠湾 Pearl Harbor でした。ここが1941年に日本軍が奇襲した、そして日米が対峙する第二次世界大戦の悲劇の発端となった港であるのかと認識し、感慨深くしたことを記憶しています。

とは言え、そこは、他方、私にとってまだ、外国というお伽話の国でもありましたが、そこへ到着し、ハワイの方たちが民俗衣裳のムームーを着て美しい花の首輪を垂らし私たちを出迎えてくださったとき、そして、私たち一人一人の首にも清楚な白色のプルメリアの花輪を掛けてくださったときは、やはり、お伽の国に招かれたような錯覚に陥りました。

それから、大地に足を踏み入れまして、ああ外国の地面も日本の地面と同じ触感であると知り、そして、空を見上げましたら、ああ空も日本で見てきた空と同じようだと知り、なるほど、外国と言ってもどれも地球の表面の地殻に立っているのだと判り、現実感に戻り、地球上人間として一種の連帯を感じました。その数年前の1960年にソ連のガガーリン氏が初めて宇宙から地球を眺め、「地球は青かった」と驚嘆されたのとは次元が違いますが、私自身の素朴な認識の感動を思い出します。

それから、私たち留学生一行は、EWC 本部に案内されまして、前庭の芝生を眺めましたとき、そこに設置されている何十もの撒水機 **sprinkler** の一つ一つに小さな虹が架かっていて競演しているさまに驚きました。私はその時まで、空高くに架かる虹の自然現象しか知りませんでした。なんと、この風景は EWC の構想の「東と西の架け橋」を喩うにふさわしいと私は解釈しました。また、EWC に造園されていた日本庭園の橋が丸いデザインの橋桁に造られていましたから、これも、「架け橋」の象徴を表現しているようで、似合うデザインだと思いました。

ところで、EWC の機関誌は、常に属称のように“**help build Asia-Pacific community**”の語句を添えていますことから、EWC は環太平洋・アジアの共同体

建設を目指していることが理解できます。その視野で見ましたとき敷地内の **Kennedy Theatre** は、多分 **J.F.Kennedy** 大統領（1961-1963）が力説したニュー・フロンティア政策の一環として創設された **EWC** 制度の記念の建物なのだろうと私は想像しました。当大統領が2年前にテキサス州ダラスで暗殺された事件と、並びに、氏が積極的に推進しようとした環太平洋・アジア地域への外交的構想とが私の心中で交錯しました。

さて、日本人 **TIP** 員6人のうち女性は私1人でしたが、いや実は、も1人いましたが、沖縄出身で、彼女だけが胸の名前カードに「**Japan**」ではなく「**Okinawa**」と書かれてありましたことに、未返還の沖縄を意識させられました。（ちなみに沖縄返還は1972年に実現されました）私たちは「**Hale Kuahine** ハレクアヒネ」という爽やかな語感のポリネシア語の名前の女子寮に案内され、ハワイの異国情緒を感じ、ハワイの歴史に初めて触れることになりました。寮内では、アメリカの **TIP** 員である **Marilyn** が私の **roommate** として紹介されました。彼女は **Wisconsin** 出身で、それから2学期間、つまり、翌年の春まで、仲良く楽しく過ごせました。今でも交流が続いています。日本人同士でも同室で暮らす機会は少ないわけですが、二つのベッドがある一つ部屋の中で毎日暮らすのですから、私としましてはお伽噺の国の人間の総体を知るような、そして、全く英語の世界に入れさせられた状態でした。そして、次第に英語を通して生活するアメリカの文化を体験し、彼女から知識上もアメリカ文化を多く学んだと思います。

キャンパスではアメリカ諸地方からのアメリカ人や、アジア諸国からのアジア人に私は初めて接し談話することができました。実に国際色豊かなキャンパスだと思いました。そして、アメリカ人も諸地方出身により地方特有の訛りのある英語を話しますし、アジアの各国の人たちは、また、それぞれの国特有の訛りのある英語を話しているのを知りました。私は英語教師として、そのように雑多な英語がありながら、英語という言語で世界の人々と意志疎通が可能であることを知りました。

つぎに、私たちが履修した専攻科目について感想を述べましょう。私たちはハワイ大学とワシントン DC 所在のジョージタウン大学で新言語学に基づいた英語学を履修しましたが、そこで **phoneme**（音素）**phonetics**（音素学）の概念を得たことは大いなる刺激でした。それまで私は伝統的学問の **phonetics**（音声学）に終始していましたから、この **phoneme** の概念を基本にして言語の音声进行分析することは広い範囲で合理的であると認識しました。この概念で他の言語も開拓しやすいのではないかとも思いました。履修した講義を通じ、アメリカでは構造言語学、はたまた、生成文法も開発されていることを知り、その導入を受けましたが、ここでは従来の伝統文法とは視点を異にし、概してコミュニケーションを視点として言語学のパラダイムの再編成が行なわれていることを知りました。そして、そのことが言語研究を活性化させていることを感じました。こうした取り組みが研究の世界を駆動するのだなという力学をも感じたわけです。

一方、私自身の英語力に実益を与えてくれましたのが、基礎の講座の **paragraph**

writing でした。それは、論理的に文章の段落を構成し論文作成に至らせる添削指導でした。今まで何処においても受けたことのない講座でしたので、この練習をさせていただいたことが私に論文作成の基礎的自信を与えてくれました。帰国後、私の学生に指導したいと思った科目でした。一方、私が既に学部時代に専攻した英米文学の知識を活用し修士号取得のための英文の論文作成を体験したいとの発想と意欲が出てきたのです。フルブライターとして、次の留学により、この希望が可能になりました。

ハワイでの2学期間を終了し、私たちアジアの TIP 一行は米本土一周旅行をさせていただき、——詳細を述べるには頁数の余裕がありません——アメリカの自然の巨大な造形に驚き、現代の文化の諸施設の壮大さに感嘆し、多様な民俗習慣の存在を知り、歴史や文化を概観できましたことは、大変楽しい、かつ、有益な旅でした。そして、途中に出会った人々の多くが、あたかもケネディ大統領が国民に問うた言葉——国民が国にたいし何ができるかを考えて欲しい——に答えているかのように私たちに親切に対応してくださり、その方たちが、国の文化の前途を意識し自ら外交官的姿勢を発揮されているように思えました。この人間風景もアメリカ文化の活性的一面だと感じました。

私自身は次のフルブライト留学の恩恵も受けましたが、この留学制度の立案者でありましたフルブライト氏がメッセージとして私たち留学生に寄せてくださっている、氏の胸中にあった言葉を考えますと——要約して「国際教育を通じて素晴らしい、そして稀な能力である empathy を開発する必要があるのです。それとは、自分を含めた世界を客観的に見ることができ、相手の立場になって感じるができる能力のことです」(We must seek through international education to develop empathy--that rare and wonderful ability to perceive the world including ourselves as others see it) ——氏の胸中には、このような普遍的に必要とされる人間像が描かれていたことに敬意を感じ共鳴せざるをえません。このような人間像こそ、話し合える人間、コミュニケーション可能な人間、外交が成り立つための人間像の標石であると思います。そして、この人間的教養があつてこそ民主主義が機能すると思うのです。

往事を回顧し私が受けた恩恵に感謝しますとともに、留学制度の実現に貢献された優れた個性の方々にも想いを馳せ、広い視野に立つことが出来る知性と感性が備わった普遍的な人間像に自分も近づくよう努力し、かつ、周囲の青年たちをも育てることが大切だと思う次第です。

## 随想

### 忘れえぬ人—アダムス先生のこと

木下 宗七

1973年の秋から約1年間、フルブライト研究員としてアメリカ、フィラデルフィアにあるペンシルヴァニア大学に滞在した。そのときから今日までたびたびお世話になり、共同研究を行ってきたF.G.アダムス先生（ペンシルヴァニア大学名誉教授、ノースイースタン大学教授）が、新年早々の1月15日に亡くなられた。1929年生まれの81歳であった。誠に残念である。お悔やみのために、先生と交流のあった友人たちと相談して、フィラデルフィアの郊外にあるSwarthmore Collegeの経済学部が優秀経済論文に贈っているアダムス賞（Adams Prize）に献金させていただいた。

先生は、1946年にミシガン大学を卒業し、引き続き大学院でクライン先生（ペンシルヴァニア大学名誉教授、1980年ノーベル経済学賞を受賞）の指導を受け、PhDを取得された。そして石油会社のエコノミストを経て、1961年にクライン先生がおられたペンシルヴァニア大学の教授になられた。そして、マクロ・地域・コモディティの分野の計量経済モデルの開発と予測で多くの研究業績を残された。特にクライン先生とともにWharton Econometric Modelというマクロ経済予測モデルを開発され、それをもとにWharton EFAという経済予測機関の開設に尽力され、その活動をリードしてこられた。

1973-74年のフルブライト・プログラムでペンシルヴァニア大学のクライン先生の指導を受けることになったが、1年余りの滞在中、クライン・グループのアダムス先生の講義やセミナーにも参加し、研究面の相談相手になっていただいた。日本に帰り、1979-81年の経済企画庁経済研究所の客員研究官の仕事のあと、1981年から始まったアジア経済研究所のアセアン経済のモデル作りプロジェクト（ELSA）に参加したが、そのときにアダムス先生に加わっていただき、コモディティ・モデルに関する論文やワークショップでお世話になった。その後、先生は客員教授として国際大学（新潟県）や神戸大学に半年滞在されたが、神戸大学の時はペンシルヴァニア大学経済学部縁のある関西の先生方と一緒に、奥さん同伴で「明治村」の観光に来られた。

1991年から2ヶ月間、文部省在外研究員として再度ペンシルヴァニア大学に滞在する機会があったが、この時には、住まいが近くであったこともあり、研究のパートナーとしてだけでなく、家内ともども先生夫妻に食事の招待を受け、独立した子供たちと家族の絆をどう保っていくかについて、先生の経験を披露していただき、人生の先輩としていろいろと教えていただいた。何事にも

気さくに相談にのってくれる先生で、後輩の研究者がアメリカに出かける際には受け入れをお願いし、適当な大学等を紹介していただいた。

1990年代からは海外の大学院で講義をされることが多くなり、特にペンシルヴァニア大学からノースイースタン大学に移られてからは、本務校の講義を秋学期の半年にし、あとの半年は、日本、タイや中国の大学院での集中講義・院生指導についやしてこられた。

ICSEAD でお会いした時、南京の大学での話を伺ったが、中国の院生は熱心だが、研究環境の方はまだまだ未整備なところが多いということであった。

昨年暮れの12月30日に、クリスマス・年賀のあいさつを電子メールでやり取りしたとき、“I am quite ill at this time “ というメッセージが届いた。早速お見舞いの返信をしたが、今から思うと、その時先生の病状は大変悪かったように思われる。

息子さんからのメールによると、先生は年末の講義を問題なく終わられ、新著の原稿も出版社に渡したところだったということである。最後まで現役教授として、また学者としての仕事をやり遂げられたことは、ある意味で幸せなことであり、敬服すべきことだと思っている。



1991年秋 アダムス先生の自宅で

## 会員の近況

2011 年度中部同窓会総会・講演会の案内有難うございました。残念ながら当日都合が悪く欠席させていただきます。東日本大震災と付随した原発事故で悲惨なニュースばかりで、気力・体力ともに衰える一方ですが戸外の花々や新緑の生命力に元気付けられているこのごろです。以上まずは総会・講演会欠席の連絡まで。

江口昇次(1964-6, JHU)

ご連絡ありがとうございます。残念ながら先約がありますので欠席させていただきます。

現在は光陵女子短大は退職し、家裁調停委員をしております。

諸戸愛子

前略 この度は 2011 年度フルブライト中部同窓会 総会・講演会・懇親会のご案内をいただき有難うございました。誠に恐縮に存じますが、都合により総会・講演会・懇親会を欠席させていただきます。よろしくお願い申し上げます。 不一

杉浦久也

2009 年 9 月に大学の制度による留学を終え帰国いたしました。その後、忙しくいたしています。同窓会は、なぜかいつも別の用事があり、すっかりご無沙汰いたしています。

今年も、大学の国際化推進事業の一環として、当日より一週間の予定でロースクールの卒業生たちをアメリカの司法制度の視察に引率いたします。陪審員の選任から事実審理、評決、そして判決の言い渡しまで視察できますし、タッチパネルで法廷審理を検索できますので、法律家のたまごたちは日本の制度を相対化して理解できるようになり、とても多くのことを学びます。私は、大変だ大変だと言いながらも、若い人たちにいろんな機会を提供できることを楽しんでいます。どうぞ、篠田先生そのほかの先生方によろしくお伝えください。

松浦 以津子 Itsuko Matsuura

南山大学法科大学院 Nanzan University School of Law

2011 年度フルブライト中部同窓会総会・講演会・懇親会のご案内を有難うございました。当日は倉敷で開催される岡山寮歌祭に参加することにしていますので、失礼します。

盛会を願います。

現在 82 歳です。毎週「力学系研究会」に参加しています。後は、クラシック音楽、囲碁、読書を楽しんでいます。

白岩 謙一

## 会務報告

### フルブライト中部同窓会 2011 年度総会

2011 年 5 月 29 日(日) 愛知大学車道校舎 第 3 会議室 午後 3 時 30 分より

#### 議題

- 1 2010 年度の事業報告 HP 承認された。
- 2 2010 年度の決算報告と監査 承認された。
- 3 2011 年度事業計画、予算 承認された。
- 4 役員人事については、役員会で決定しメールで連絡する。
- 5 財団法人 日米教育交流振興財団の役員については、役員会で理事 1 名、評議員 2 名を決定し推薦する。結果をメールで連絡する。

#### 2010 年度決算

収入	金額	適要	支出	金額	適要
前期繰越	320,507		総会案内	25,541	
懇親会収入	63,000	2000X31 人	総会懇親会	43,700	
年会費	198,000	3000X66 人	講師謝礼	10,000	
	1,500	1500X1 人	出版費用	132,443	
受取利子	38		例会案内	14,610	
			例会懇親会	42,710	
			テープ起し	10,395	
			事務費	5,400	
			小計	284,799	
			次期繰越金	298,246	
計	583,045			583,045	

2010 年度の収支決算につき、領収書、預金通帳等関係書類によって監査を行った結果、適正であることを認め、ここに報告します。

監事 小坂敦子

2011 年 5 月 29 日

## 2011 年度事業計画

1 総会、例会の開催 承認された。

2 会報の出版 承認された。

## 2011 年度予算

収入	金額	適要	支出	金額	適要
前期繰越	298,246		総会案内	31,000	
懇親会収入	60,000	2000X30 人	懇親会飲食	60,000	
年会費	201,000	3000X67 人	講師謝礼	20,000	
	7,500	1500X5 人	出版費用	140,000	
	10,000	1 人			
受取利子		58	例会案内	15,000	
			テープ起し	10,000	
			事務費	10,000	
			会議費	10,000	
			予備費	5,000	
			小計	301,000	
			次期繰越金	275,804	
計	576,804			576,804	

## フルブライト中部同窓会会則

制定 1983年10月1日  
改正 1993年 6月5日  
改正 2009年 5月30日

### 第1章 総則

- 第1条 本会は、フルブライト中部同窓会と称し、  
英文を **Chubu Fulbright Alumni Association** と称する。
- 第2条 本会は事務所を名古屋に置く。
- 第3条 本会は、会員相互の親睦を図り、会員の経験、情報をもとに、より一層の啓発を図り、  
日米親善および相互理解を増進することを目的とする。
- 第4条 本会の会員は、正会員、準会員、賛助会員、名誉会員、シニア会員とする。
- 第5条
1. 正会員：ガリオア・フルブライト奨学金のグランティアー
  2. 準会員：フルブライト奨学金のグランティアーで日本に滞在しているアメリカ人
  3. 賛助会員：本会の目的に賛同し、役員会の承認を得た者
  4. 名誉会員：正会員のうち、本会に特別の貢献をし、役員会の承認を得た者
  5. シニア会員：正会員のうち、本人の申し出があり役員会の承認を得た者

### 第2章 事業

- 第6条 本会は次の事業を行う。
1. 会員相互の交流、親睦を深めるための活動
  2. フルブライトその他の奨学金を受けて渡米するグランティアーへの指導、援助
  3. 日本に滞在するフルブライトグランティアーの研究活動 および滞在中の生活への指導援助
  4. その他日米相互理解を深めるための活動および役員会で必要と認めた事業

### 第3章 総会

- 第7条 総会は毎年1回開催する。その他役員会で必要と認めた時には、臨時総会を開催することができる。
- 第8条 総会では、次の事項を行う。
1. 事業報告、収支予算、決算の承認
  2. 役員を選出
  3. その他の本会運営のための重要事項の議決
- 第9条 議決は出席正会員の過半数をもって成立する。

### 第4章 役員

- 第10条 本会には、会長1名、副会長若干名、幹事若干名、監事を置く。
- 第11条 任期は2年とし、役員の新選を妨げない。

### 第5章 会計

- 第12条 本会の運営資金は、会費および寄付その他の諸収入をもって、これにあてる。
- 第13条 正会員の年会費は 3,000 円とする。  
名誉会員およびシニア会員のうち申し出があった者は 年会費を免除される。  
賛助会員は 1 口 年 10,000 円とする。
- 第14条 本会の会計年度は4月1日に始まり、翌年3月31日に終わる。

発行年月日	平成 23 年 6 月 29 日
発行	フルブライト中部同窓会
事務局	461-8641 名古屋市東区筒井 2-10-31 愛知大学会計大学院星野靖雄研究室 フルブライト中部同窓会 電話&Fax 052-937-8264 Email: fulbnagoya@gmail.com URL: <a href="http://leo.aichi-u.ac.jp/~hoshino/Fulbright.html">http://leo.aichi-u.ac.jp/~hoshino/Fulbright.html</a>